

指定討論者として

私がお三方の発表をどんな角度から聴かせていただこうとしているのか。まず、この点を述べたいと思います。

お話しを聴かせていただく観点の一つは、AIが浸透した社会における経済的格差の増大、それから監視社会の進行、別の言い方をすればプライバシーの危機ですが、この二つの社会問題をどう意識されて社会科実践をなさろうとしているのか、ということです。

こうした観点が生まれた背景にある私のAI理解をごくかいつまんでお話しします。新井紀子という方の『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済、2016年）という本から学んだものです。

新井さんは“AIは所詮、計算機だ”と言い、神様扱いしていません。またAIが神様になる日が来ることもない、と断言しています。その理由として、数学という学問が“論理、確率、統計”という数学の3つの言葉以外の新しい言葉を創り出さない限り、人間の知的・情的な働きをトータルに超える「人工知能」を作り出すことは不可能だからだということを挙げています。

読んでいてなるほど、と思いましたので、私はAIについて新井さんの見解に従っています。

このような紹介の仕方をする、新井さんはAIが社会に与えるインパクトを軽くみていると思われる方も出てくると思いますが、そうではありません。“今ある職業の半分近くはAIに取って代わられる可能性がある”というかなり深刻な受け止め方をしています。この受け止め方もなるほどと思いましたので、受け入れております。

「今ある職業の半分近くがAIに取って代わられる」ということ具体例として、新井さんは「半沢直樹はいなくなる」ということを挙げています。半沢直樹は、ある企業や個人の資産状況などを調べ、お金を貸してよいかどうかを判断する与信という仕事をしています。こういう仕事は人間よりAIのほうが得意なので、AIに取って代わられるだろう、と新井さんはいうのです。オックスフォード大学の研究チームも同じようなことを言っていると新井さんは言っています。

したがって、AIが苦手とする仕事に就くのに必要な能力を育てる教育を若者たちに保証しないと、社会に大量の失業者があふれる、というのです。これが、私が冒頭に述べた「お話しを聴かせていただく観点の一つ」として、「AIが浸透した社会における経済的格差の増大」を挙げた理由です。

もう一つ挙げた「監視社会の進行」というのは、街に溢れている防犯用の監視カメラとその映像を解析するAIによる画像処理技術の進展に対する私の違和感、というか恐怖感といったものがあります。その恐怖感は、学生のときに読んだジョージ・オーエルの『1984年』という小説に由来します。この恐怖感は、アマゾンが送ってくる「あなたにお勧めの本」な

どというお知らせで一層強いものになっています。さらに言うと、卒業生に2か月ほど前に言われたこともこの恐怖感を煽っています。彼女は「グーグル検索で自分の名前を入れたら、先生が作ったゼミのホームページが出た。そこに自分の写真も載っている。写真を落としてくれ」というのです。そこで、その場にいた他の卒業生たちが、自分の名前を入れて検索をかけたのですが、ヒットしませんでした。だから、「写真を落としてくれ」といった卒業生の名前がレアなもので、他にヒットするものが少なかったため、グーグル検索の高い順位でヒットしたのではないかという結論をみんなで出しました。また、写真と名前が一致したから彼女の写真が出てきたのではなく、彼女の名前が載っているページにたまたま彼女の写真があったから、名前を入れたら画像まで出てきたように見えてしまったのではないかという結論も出しました。

さて、もう一つの観点は、3人の先生方のご提案する授業が新しい社会科論に基づくものなのか、それとも社会科論は従来からあるものに拠り、教材や学習活動の新しさというレベルのご発表なのか、というものです。

これについて話していると長くなりすぎますので、後で詳しく触れたいと思います。

2020年2月23日
於：社会系教科教育学会
吉田正生（文教大学教育学部）